

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月21日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520008

研究課題名（和文） ソクラテスの対話の構造と真理

研究課題名（英文） Truth and the structure of Socratic dialectic

研究代表者

田中 伸司（TANAKA SHINJI）

静岡大学人文社会科学部・教授

研究者番号：50207099

研究成果の概要（和文）：本研究は、ソクラテスが知の所有者であることを否認しつつ（無知の自覚）、他方で自分こそが真理を語る者であると断言するという矛盾とみえる事態の解明に取り組み、ソクラテスの真理の捉え方がイデア論と通底しているという仮説の検証を行った。その結果、真理主張には想起というレトロスペクティブな構造が関わっていることを明らかにし、さらに『国家』の魂論・友愛論の分析によって自分自身との関係性が正義の核にあることを論証した。

研究成果の概要（英文）：This study addresses seemingly inconsistent texts in which Socrates on the one hand denies that he has the knowledge (other than an awareness of his own ignorance: 'I only know that I know nothing important.'). and on the other hand asserts that he is a person who tells the truth. The study tests the hypothesis that Socratic truth is deeply connected to the theory of ideas, shows that truth claims involve a retrospective structure, and demonstrates that one's relationship with oneself is located in a core of justice through analysis of the discussions concerning with *psyche* and *philia* in the *Republic*.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：倫理学、哲学、西洋古典、プラトン、ソクラテス、対話、魂、フィリア

## 1. 研究開始当初の背景

ソクラテスによる否認と断言については、それらは別の対象についてのものであるとする解釈（ヴラストスやアーウィンたちの解釈）と、同じ事柄をめぐっているとする解釈

（たとえば岩田靖夫の解釈）がある。他方、エレンコス（反駁的対話）というソクラテスの対話法については、『ゴルギアス』において臨界点に達し、それを放棄することによって中期対話篇へと展開したとする解釈が主

流である。このような研究状況のなかで本研究は、ソクラテスが知の所有を否認することと真実を語る者であると自認することが「対話における真理から導き出されている」と主張し、知と真理についての否認と自認という矛盾に正面から挑もうとした。

## 2. 研究の目的

プラトンの対話篇『ゴルギアス』と『ソクラテスの弁明』において、ソクラテスは知の所有者であることを否認する（いわゆる「無知の自覚」の表明）とともに、じぶんこそが真実を語る者であると断言している。本研究が目指すのは、知の所有を否認することと真実を語る者であると断言することと同じ一つのことの二つの面であることを明らかにし、そこに見出される真理の捉え方が『パイドン』における想起説と（さらには『国家』でのアイデア論と）通底しているという仮説を論証することである。

## 3. 研究の方法

本研究はつぎの二つの研究からなっている。

(1) [テキストの分析] 『ゴルギアス』および『ソクラテスの弁明』における、知と真理をめぐる否認と断言という事柄が互いにどのようにかかわり合っているのかを明らかにすること。

(2) [仮説の検証] 『ゴルギアス』および『ソクラテスの弁明』において見出される真理の捉え方が、中期対話篇における想起説と（さらには『国家』でのアイデア論と）通底しているという仮説を論証すること。

## 4. 研究成果

(1) 『ゴルギアス』（及び『ソクラテスの弁明』）について：『ギリシア哲学セミナー論集 Vol. VI』への研究成果発表を基盤として、つぎの三点から分析を行った。①ソクラテスの議論の構造、②多義的と見える「真理」の用例の検討、③論理的な真理とは異なった「真理」をめぐる倫理的な検討。とりわけ、『ゴルギアス』第二部のポロスとの対話における歪みについて新たな知見を得ることができ、成果を（『ソクラテスの弁明』の分析と合わせて）『理想』（理想社 686号）に発表した。

(2) 想起説について：日本倫理学会での主題別討議において、想起説をめぐる本研究の成果の一部を発表した。即ち、想起とは失われてしまっているものへの回帰あるいは欠けているもの・不在であるものの発見である。それは、他方、過去を美化し聖域化し、そのよ

うに想起された事柄を共有する者たちの閉ざされた共同体を形作るという問題をはらんでいる。しかしソクラテス・プラトンの想起説は少なくとも、私たちの価値に関わる思考には想起という、レトロスペクティブな構造があるということを示している。しかも、ソクラテス・プラトンの知と徳の問題が形而上学的なあるいは超越的な世界と没交渉に理解されるとき、それは単なる個の内面的な涵養となり、習慣や性格という位相によって捉えられてしまうことを示した。

(3) 『国家』について：『国家』については日本西洋古典学会の欧文雑誌（JASCA）及び静岡大学人文社会科学部紀要『人文論集』に、研究成果を発表した。特に後者においては、前者の第1巻における「正義と報酬」に関する研究成果を基礎に、第4巻における正義の規定（443e-444a）を、魂のうちの葛藤（理知的、気概的、欲望的という三要素の間の緊張と対立）というコンテクストから読み解き、第9巻の「外なる人と内なる人」の比喻および第10巻の「立派な人（エビエイクエス）」との比較考量作業を行い、「自己との関係性」が真理と知において核となっていることを論証した。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

- ① 田中伸司、プラトンの『国家』における友愛と正義、静岡大学人文社会科学部紀要『人文論集』No. 63-2、2013、査読無。DOI: 10297/7069
- ② 田中伸司、Justice and Reward: On the Art of Wage-earning in Book 1 of the Republic, *Japan Studies in Classical Antiquity* vol.1, pp.87-97, 2011, 査読有。
- ③ 田中伸司、ソクラテスの問い、『理想』685号（理想社）、2～12頁、2010、査読無。
- ④ 田中伸司、応用の学としての倫理学と古典テキスト ―現代の医療にどう向き合うか―、神戸大学人文学研究科『21世紀倫理創世研究』第3号、18～33頁、2010、査読有。
- ⑤ 田中伸司、『メノン』篇における想起とアポリア、『静岡大学人文学部 人文論集』第60号の2、87～98頁、2010、査読無。
- ⑥ 田中伸司、カリクレスとの対話においてソクラテスは何を達成しているのか、ギリシア哲学セミナー編『ギリシア哲学セミナー論集 Vol.VI』、1～14頁、2009、査読無。

〔学会発表〕（計2件）

①田中伸司、[主題別討議]道徳（徳）は教えられうるか—初等・中等教育における道徳教育について—（提題1）問題の始発点と歴史的回顧—古代ギリシア、特にソクラテス・プラトンの思想圏から—、日本倫理学会第61回大会、於慶応義塾大学・三田キャンパス、2010年10月9日。

②田中伸司、応用の学としての倫理学と古典テクスト—現代の医療にどう向き合うか—、神戸大学大学院人文学研究科大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話力を核とする人文教育」主催フォーラム「バイオエシックスの諸相—原理と実践」、於神戸大学大学院人文学研究科、2009年7月14日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田中 伸司 (TANNAKA SHINJI)  
静岡大学人文社会科学部・教授  
研究者番号：50207099

### (2) 研究分担者

該当者なし ( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

該当者なし ( )

研究者番号：